

核兵器なくそう・世界青年のつどい第3回準備委員会議事録メモ

2009年2月3日(火) 18:30~20:30 @日本原水協会議室

参加者：石垣、木村、宇都野、大熊(うたごえ)前川(原水協)野村(全労連)小川(民医連)杉山(学生・ヒロシマナガサキを受け継ぐ会)利波(静岡現地実行委員会)梶原(学生・原水協)小林(千葉)西村(平和委員会)イ・ジュンキュ(韓国)

経過報告

参加の呼びかけを関係団体に送付したこと、各団体が加盟組織に呼びかける要請を行ったこと、都道府県原水協、特に静岡近県に重点的にチラシを配布したこと、原水協通信にチラシを掲載したこと、パネルディスカッション要請をイ・ジュンキュさんに行い快諾を得たこと、イジュンキュさんのプロフィール紹介を行った。

現地静岡の報告

利波：日曜日の現地実行委員会では、中央が出してきた議論と現地の議論の中身の齟齬を埋める論議を行った。NPT再検討会議が浮き上がってしまうと言う率直な提案があった。貧困問題が以前から静岡では問題になっており、戦争にもつながっている。若年労働者の生存権を貧困問題にからめて、論議をするべき。いきなりNPTの問題を取り上げても、理解が深まらない部分もある、聞きっぱなしになってしまうこともある。パネルディスカッションの1時間は長すぎる。参加型の企画に向けて、練り直すことも必要。平和の企画としてつながるスイッチは一人ひとり違う、ソレはNPTではない、議論が必要。

議論がずれている理由は世界青年のつどいと、平和でナイトのそもそもの成り立ちや集まってくるメンバーもちがうこともある。

実質の議論は、中央が1月に対して、地方は8月から6回の論議を重ねてきた、企画の組み立てのベース、議論の組み立て方が違っているような気がする。安齋育郎先生の必然性や静岡の映像紹介を任されたという経過も不明瞭、継承と発信をどう表現するかと、情勢をどう捉えるか？今回のピクニデーは何を主軸に伝えるのか？

パネルディスカッションの必然性が分からない。個々の企画の組み立てについて、組み立ての明確な論理を知りたい。現地の意見もあまり反映されずストレスである。

参加者が聞きっぱなしのつどいとなるのも避けたく、中央の企画ではその恐れがある。

参加型企画としてはディベートを入れてみたいと思う、飽きさせないことにつながると思う。

NPT再検討会議はイベント化してしまえばよいのでは、グッズの申し込みやニューヨークに行くと言うことは難しいので、グッズ(音声をとどける)などを通じたこととりくむべき。

野村：中央と現地のギャップを埋める論議をすべきという意見が出て若干論議

前川：現地の実行委員会の開始は早く、認識のズレの原因となった。しかし、大事なことは参加者が何を獲得するかである。今後の組み立てについて話し合いたい。

中央としては NPT を最初に出すということにこだわっているわけではなく、NPT に向け、どのような運動を展開するか？という観点でこの間意見を述べている。

そのうえで、原爆体験者、ビキニ事件などの、原水爆禁止運動が広がったことの実態から今の核兵器をめぐる大きな情勢の変化、とりわけオバマの就任などをつなげ、核兵器をなくすということを参加者みなで意識できるようなもの、参加者の数百人が世界青年の集いにどう取り組むか？を作り上げる集会としてみたい。

野村：このギャップは埋められるのか？このままで行くと、世界青年のつどいと現地企画が別になってしまうこともありえる。

世界青年のつどいはこの間共催や協力で関係を作ってきた。このことをどう考えるか？

利波：NPT と自分の生活が結びつかない人も多い。NPT のことの重大さはこの間のオルグで認識したが、多くの人はその点の理解が不十分だと推測する。静岡の現地実行委員長は学習会で被爆体験を聞いて、原水禁運動にめざめ、組合を説得するなど、強力で運動を開始した。現実と結びつかない部分がどうしてもある。

野村：現地の論議開始は早いことは厳然とした事実。NPT は全国的には重要な機会であり、重視したい。現地の貧困から迫るという狙いも分かるが、取り扱いは注意が必要。現地の思いと、中央がこの間重ねた論議を尊重しながら進めることが重要。分離するのか？ということも問われてくる。その際は分離しながら一致することが重要。

DVD の内容についても議論があった。ウェイトの問題がある。講師も現在考えられる最高のものを考えた。

利波：先輩からは「平和でナイトという企画は不十分さをおそれずに、青年同士が考えて話すことが重要」と言われた。安斎先生を呼ぶのは異論がないが、全体としてつながるのかの展望がない。何を語って、何を獲得するのか？不十分ながらみんなで作ることも重要。静岡では現地の問題として貧困問題が目前にあり、大きく扱うということになっている。生協労連では、現地を尊重し、現地で会議を行うということもやっている。このビキニデーでは何を獲得するのかということ率直に論議することが重要。

野村：今年度は、一致点を確認して共同開催を迫及する。不一致点が生まれないように来年度は認識を一致しながらスタート時からすすめることが重要。

利波：現地はつどい直前になると作業で徹夜状態となる、それを回避するため、先行して準備を進めてきた。疲弊して続かないということが生まれる。

野村：フライングは今後さげたい、明確な工程表を作って中央と現地で一致して準備を進めることが重要。今後反省会を含め、論議を深めることが重要。

核兵器なくそう・世界青年のつどい in 静岡の経過説明

前川：「つどい in 静岡」を始めたのは被爆 60 年である 05 年 3 月。ビキニからニューヨーク、ヒロシマ・ナガサキへということで「ACT ONE」を行った。06、07 年は青年のつどいはフォーラムとして分科会の時間枠で実施し、夜は「平和でナイト」を行っていた。08 年は「平和でナイト」実行委員会と「つどい」準備委員会が共催で「つどい 08in 静岡」を行い、今年は「平和でナイト」実行委員会も「つどい」準備委員会に入った形で準備委員会主催の「つどい 09in 静岡」開催になった。

大熊：ギャップの原因、今後の改善のために整理して話しておく必要がある。静岡側は青年が聞きたい、やりたいという要求を掲げ、現地の人を組織したい。全国側は集まった青年に知らせたいこと学んでほしいことを前面に出した企画になる。その点のすり合わせが不十分だったのでは。その点で開始の時期が重要。中央も早める努力が必要と考える。平和行進などの準備にもつながる問題点である。

西村：つどいを通じての狙いは文字化する必要がある。狙いを明確にする必要がある。

プログラム

前川：プログラムの概要説明、この間の運営委員会での論議を踏まえたプログラムの改訂部分について説明をうけた。

パネルディスカッションの進め方については、参加者の知的要求にこたえるべく、質問の事前アンケート聴取などを含め検討をすること

青年運動大交流会のネーミングの検討が提案された

アイスブレイク

大熊氏から企画趣旨、選曲の基準、候補曲について提案を受けた。

折り鶴、ビリーブ、すてきな友だち、大きな歌、ピースサイン、歩いていこう
プレゼンテーションを受けた。

折り鶴：3

ビリーブ：3

すてきな友だち：3

大きな歌：1

ピースサイン：2

歩いていこう：多数

にて、平和行進にもつながる歌とのことで、歩いていこうに決定。

現地実行委員長の挨拶を3分設ける。

パネルディスカッション

野村：60分の全てをパネルディスカッションは難しい、参加者の質問に答えていく参加型の企画をつくる。倉木麻衣方式の採用を提案する。

西村：パネルディスカッションでは何を話し合うのか？

前川：核兵器やNPTといった日常生活とは乖離した問題を自分たちに引き付けるためにはどうすればいいのかということのパネリストのみなさんには話してもらいたい。

イジュンキュ氏：60分は長いようで短い。

参加者の顔ぶれも非常に多様なので、一問一答方式はコーディネーターの力量が非常に問われ、プロでないと難しい。

タイトルは：「2010年NPTへ 私たちにできること」としたほうが、議論の内容が抽象化しないとおもう。自分の体験から各パネリストからの話を引き出すことができるのではないかな？

西村：安斎氏からは、貧困と戦争を結んだ話をしてもらうことを求めているのか？

イ氏：その後の企画ともつながるのか？

前川：つながる形を考えている。

西村：市民の立場で核廃絶の奮闘を話してもらおうということ、安斎氏からは、情勢の話をしてもらおうというつくりでよいのか？

前川：そうである。

野村：表題は良いか？

イ氏：全体の流れとして：NPT を意識した中身となっているが、提案のタイトルではそうならないことが考えられる。パネルディスカッション後の交流会は NPT を意識し、各参加者、青年の発言を引き出す形にしたほうがよい。
交流の時間は、まとめなくても、パネルディスカッションのタイトルにあるように、NPT に向けて何ができるか？ということが交流できれば良いと考える。

確認：パネルディスカッションのタイトルは「2010 年 NPT へ 私たちにできること」、
青年大交流集会は「青年が語る『核兵器のない世界へ』」とする。
具体的な内容についてはもちかえって検討とする。

静岡現地実行委員会の映像

利波：全世界的に観れば、核兵器廃絶が流れとなっていることを確認する中身としたい。
2 月 15 日の現地打ち合わせでラフ確認、22 日完成を目指しているが、物理的には厳しい。
最終的には 10 分から 12 分程度を目指しているが、最終まで相当な作業を続けなければならなくなると思う。

大熊：映像よりも、実際に人が演じたほうが集中が集まることもあり、今後は検討を求めたい。過去は非常に好評を得た。

パンフレット

目的や仕様、内容、工程、などパンフの提案を全労連野村氏より受ける

西村：基礎学習資料、の作成については、現地のたたかいの歩み、とりわけ平和でナイトの成り立ちをパンフレットに盛り込んではいかがか？

利波：分量については 12 ページが限度なのでは。

野村：総ページ数は重要ではない。参加者がもらって良かった。役に立ったと思ってもらえるものを作る必要がある。活動報告は原水協に集約された活動をいかし、作成を進めていく。

利波：広島・長崎の漢字・カタカナ表記はどうするのか。

大熊：今回は場所を示すかたちでしか使われていない。

前川：検討します。

参加者組織

前川：ピースバスツアーなど各地で取り組みが進められている。今後も情報を寄せてほしい。

ビデオプロット

- ・ コンセプト、具体的な流れ、ビデオプロットの具体的な押し出し部分について説明を受けた、とりわけ、参加者の生の声を引き出すという点を重視する内容を検討している。
- ・ パネルディスカッションの原稿などがあると、盛り上がりをおさえる上でビデオ作成に役立つので事前をお願いしたい。

その他

- ・ 農民連の軽食ブースは会場スペースを調整することで現地をお願いする。
- ・ 書籍ブースは中央が3・1ピキニデー実行委員会と相談して調整する。

以上